

# 戦後詩における「死」のイメージ

山 本 捨 三

現代人の人間的悩みは、その現実性において、前世紀末の個人的世界苦よりも、はるかに人類の共同性と連帯意識に結びついている。その原因はいうまでもなく、今世紀の二つの世界大戦と、現在も終らぬ戦争の惨劇、また現代社会の根深い病状に反応する、現代人の心性にもとづいている。たとえばここにそのような詩がある。

予 感 田村 隆一

……世界の悩みが彼を一個人に追ひ込む 世界の悲しみが彼の両の眼を抉り出す……この二十年間 戦争と戦争との間に雨は地上を濡らしている 街はいくども形を変えた そして彼の幼年時代の記憶の街はこの街から拒絶されている。

イメージ 同

その男は、わたしの父ではない、それに、わたしの孤独な友人だというわけでもない。ただわたしは、彼と同じ存在であり、経験であり、また共同のイメージをもつものにすぎない。そして、わたしは彼のように、第一の大戦のとき生れ、第二の大戦できつと死んでしまったのだ。……

……週末の夜の、秋から冬にかけて流れる霧の中から彼が現われてくるとき、わたしは叫ばずにはいられない。「きみはどこから来たのか!」。

世界の悩み、世界の悲しみが、かれを一個人に追いつかして、かれの内部が人間共同のイメージとなるのが、現代という世界の特性である。

戦争の犠牲と責任と悔恨、そしてその惨禍! その渦中から死にそこなって帰ってきた幾多の若い詩人たちの傷口は、一様にその怨念、その抗議、その悔恨において永久に消すべくもなく共通していた。

一九四〇年代・夏

同

……「一九四……年／強烈な太陽と火の莖の戦線で／おれはなんの理由もなく倒れた だが／おれの幻影はまだ生きている」／「おれはまだ生きている／死んだのはおれの経験なのだ」／……われわれはこの地上をわれわれの爪でひかく／星の光りのような汗を顔にうかべながら／われわれはわれわれの死んだ経験を埋葬する／われわれはわれわれの負傷した幻影の蘇生を夢みる／……彼女の眼は崩壊と滅亡だけを噴めてきた人の悲劇的イロニイでみちている／……彼女の批評は都会のなかに沙漠を 人間のなかに死んだ経験を 世界のなかに黒い空間を覚醒する そして／われわれのなかにあの未来の傷口を!」  
これらの死と未来のイメージは、個人のものであると同時に、わ

れわれすなわち人類共同のイメージである。それは、次の回想の戦後詩の一傑作にもみられる。

死んだ男

鮎川 信夫

たとえば霧や／あらゆる階段の登音のなから、／遺言執行人が、ぼんやりと姿を現す。／——これがすべての始まりである。

……

埋葬の日は、言葉もなく／立会う者もなかった、／憤激も、悲哀も、不平の柔弱な椅子もなかった。／空にむかって眼をあげ／きみはただ重たい靴のなかに足をつつこんで静かに横わったのだ。／「さよなら、太陽も海も信ずるに足りない」／Mよ、地下に眠るMよ、／きみの胸の傷口は今でもまだ痛むか。

右の「太陽も海も信ずるに足りない」は、人間破壊の戦争の犠牲者（死者）に対するときかの神も大自然も何一つ信ずるに足りないという、作者の近代文明の無力さに対する烈しい不信のあらわれである。

田村も鮎川も、戦後の詩誌「荒地」（昭22）グループの詩人である。かれらはまさに共同的に、あの強制された戦争体験をもとに、戦争への近代文明への抗議をなげつけることによって、失なわれた人間性の回復を烈しく欲求しているのである。

戦後詩壇に荒地グループが画期的に提出した共同のマニフェストA Xへの献辞V（無署名ではあるが実は鮎川信夫執筆、一九五一荒地詩集）は、こう発言した。「現代は荒地である。……破滅からの脱出、亡びへの抗議は、僕たちにとって自己の運命に対する反逆的意志であり、生存証明でもある。僕達や君に未来があるとしたら、現在の生に絶望していないことよってである。」と。

鮎川はさらに、右の詩集に載せた詩論「現代詩とは何か」において、こうも立言している。「われわれにとって唯一の共通の主題は、現代の荒地である。……戦争という共同体験を持つことよって戦後の荒地に生き残ったわれわれは、われわれ自身の生活と共に、新しい時代の課題に直面することになったのである。」

「戦後の破滅的要素に満ちた社会をめぐる、現代の知性の感受性と行動性の限界は、ニヒリズム、カトリシズム、コミュニズムの図式の上に描くのが常識であるが、現代を全く荒地化せしめた終末的近代の自覚という歴史意識が根本にあるわけである。われわれが常に外部からの問題を否定的に受け取ってきたという懷疑的傾向には、近代主義がベルグソンやフロイト以後、一般的な社会的危機や政治の圧力による人間の不安、苦悩、絶望、不満等に対して殆んど無力であり、その度にマルクス、レーニンが担ぎ出されたりすることに對する不信の感情が含まれている。」

「われわれはいまだにわれわれの不安な荒地の幻影から遁れることは出来ない。死んだ経験を埋葬し、負傷した幻影を夢みるわれわれは、失われた人間の価値たる正義、真実、愛、美を夢みる。」

「われわれの荒地に対する愛とは、単に滅びつつあるブルジョア文明に対する愛ではなく、とりもなおさず現代そのものに対する愛を意味する。それは文明の伝統の危機を招き、荒廃と狂気と不信に陥っている世界に耐えつつ、われわれを救う永続的価値をなんとかして見出そうとする一つの詩人の態度である。」

「詩人の精神は生々とした人々の間や生気に満ちた地球の上を活動しながら、人間の精神が内心ひそかに承認しているところの無名にして共同なる世界を見出そうとするのである。われわれの生活の

向上にとつて、最も必要なものは、……互に連帯して進み得るような源泉的感情の基礎を発見することである。」と。

これらの発言は、「荒地」の詩人たちの戦後の良心——人間平等の、すなわち共同と連帯の世界を発見しようとする——を代表的に語っている。そしてその内容を玩味するとき、ここに語られた人間的な精神と感情は、まさに上掲諸詩の内容とびつたり一致しているのを知ろう。(鮎川自身右の文章の間に、田村の作品八一九四〇年代・夏Vなどを引用し、説明している。)

鮎川信夫・田村隆一・三好豊一郎・木原孝一・黒田三郎・北村太郎・衣更着信・加島祥三・中桐雅夫ら「荒地」派の人々の詩には、死のイメージが充滿していることを直ぐ感ずるだろう。その理由は、かれらの生・運命が「荒地に生きているという暗い経験世界の終末的な幻滅感」(Xへの献辞)と密着しているからである。しかしかれらが現在の生に絶望してはいないのは、この終末的な幻滅感に陥没せず、そこから「一条の光線を摘みとる」(同)決意を有しているからである。ゆえに、「亡びの可能性は、一種の救いに外ならぬ……。破滅からの脱出、亡びへの抗議は、僕たちにとって自己の運命に対する反逆的意志であり、生存証明でもある。」(前出)ことに帰着するのである。

こうして、かれらの詩にくりかえし、おびただしくあらわれる死・死者・屍体、あるいは自殺・射殺などの死のイメージや用語は、今次大戦後の実存の状況や内面の表現に不可欠なものとして、現代人の不安や虚無感や危機感のシンボルである。例を「一九五二荒地詩集」から引用してみよう。

苦痛と、／屈辱と、ひき裂かれた希望に眼を吊りあげて彼は死ん

だ。(墓地の人、北村太郎)

橋の下のブロードのながれ、／すべてはながれ、／われわれの腸に死はながれる。(雨、同)

ひどく降りはじめた雨のなかを／おまえはただ遠くへ行こうとしていた／死のガードをもとめて (繋船ホテルの朝の歌、鮎川信夫)

死の中にいると僕等は数でしかなかった 臭いであり場所ふさぎであった 死はどこにでもいた (死の中に、黒田三郎)

田村隆一の詩には、とくに衝撃的なイメージが多い。

窓から叫びが聴えてくる／誰もいない部屋で射殺されたひとつの叫びのために／世界はある。(幻を見る人、一九五二荒地詩集)

わたしの屍体に手を触れるな／おまえたちの手は／「死」に触れることができない。(立棺、同)

戦後新しく興った詩劇の世界でも、戦争を告発するために死は不可欠のテーマであった。

わたしは知っています／屍体のない多くの「死」を……わたしは知っています／見わけのつかない多くの「死」を。……わたし「死」は わたしたち葬られざるすべての／死者のもの／あなたの愛にはこたえられない／あなたたちが一発の銃弾を射ったとき／故郷では／罪のない女がひとり死んでいった／あなたたちがひとつの村を襲ったとき／故郷では／罪のない多くの乳児が死んでいった (島へ、木原孝一、「詩と詩論」第二)

人間の屍体を思うとき、ぼくはボードレルの詩集「悪の華」の中の作品八腐屍Vの戦慄が忘れられない。

想い起そう、恋人よ、僕たちの見たものを、／晴々と美しい夏

の朝に、／小径の角に、ぞっとするような腐った屍体が、／散り敷く小石を臥床にして、／

淫蕩な女のように、両脚は空ざまに、／毒の汗を滲ませて火と燃え上がり、／その形は厚かましくまたしどけなくて、／悪臭を放つ腹を曝していた。／

太陽はこの腐れ肉の上に燦々と輝く、／程よくあぶって焼こうとするのか、／偉大な「自然」が嘗て一つに混ぜ合せたものを／百倍にして返してやるための親切心か。／……

——あけれどもいつか、あなたもこの汚物に、／この恐るべき腐敗物に似るだろう、／僕の眼の星よ、僕の内なる太陽よ、／僕の天使、僕の情熱、あなたも！（福永武彦記）

この十九世紀末象徴詩は、肉体のはかなさと自然の冷酷を、一つの世界苦としてうたっている。しかし最後に、その時に、美しい人よ、告げ給え、あなたに／くちづけを惜しまぬ蛆虫に、／昔の愛は腐敗し果ててもその愛の形と／その神聖な精華とは僕がこれを保ったと！とあるように、作者は主体的愛の深さ、精神化された愛の永遠性を確信しているが、ここにも腐屍の戦慄は必ず新しい読者をもとらえるであろう。

しかし、原爆その他科学兵器による殺戮の時代である二十世紀後半期の現代人の世界苦は、その悲惨さと社会的現実感において、前世紀末象徴詩をはるかに越え、しかも無名の共同意識を確保している。——われは同時にわれわれであり、おまえは同時におまえたちであり、おまえは同時にわれであることにおいて。

わたしは屍体を地に寝かすな／おまえたちの死は／地に休むことができない／わたしの屍体は／立棺のなかにおさめて／直立さ

せよ／地上にはわれわれの墓がない／地上にはわれわれの屍体をいれる墓がない。（立棺、田村隆一）

共同に安らかに死ぬことのできない世界（現代）は、また共同に安らかに生きることのできない世界である。この詩は、死も生も拒否された現代を告発している。

詩人の世界苦が、巨大な科学的兵器の戦争に烈しく抗議したのが、峠三吉の「原爆詩集」であることはすでに周知だが、もはや忘れかけている人がありはしまいか。その一つ、——

むせぶようにたちこめた膿のにおいのなかで／憎むこと 怒ることをも奪われはてた あなたの／にんげんにおくった 最後の微笑

そのしずかな微笑は／わたしの内部に切なく装填され／三年 五年 圧力を増し／再びおしてきた戦争への力と／抵抗を失ってゆく人々にむかい／いま 爆発しそうだ。（微笑）  
この抗議の精神は、峠と同じく「荒地」派以外の詩人たちにおいても同様だった。

子を等を焼き チンパ・片目の化物にしたのはダレ！天使に化けた狐の仕業というが いずれは ひとの おごりです 無為というおごりの

△ああ この懶墮 救い得ぬ 神等何者ぞ▽（チャルメラ・マ一チ、山本太郎）

日本の敗戦からすでに二十余年の現在、ぼくらの脳裡からあの戦争体験は知らず知らず忘れられゆきつつある。むしろ観念的に、いまだ終らぬベトナム戦争に心を痛めている。それも現時点におけるぼくらの世界苦の、現実的なあらわれではある。しかし、折りも

折り、人々の忘れゆきつつある戦時下の悲惨な体験を、ともに新しく歌い上げている詩と詩人を発見した感動は、ばく一人のものであろうか。その詩人は石垣りんである。見よ！

甲 詞

職場新聞に掲載された一〇五名の戦没者名簿に寄せて  
ここに書かれたひとつの名前から、ひとりの人が立ちあがる

ああ あなたでしたね。／あなたも死んだのでしたね。

活字にすれば四つか五つ。その向こうにあるひとつのいのち。  
悲惨にとじられたひとりの人生。

たとえば海老原寿美子さん。長身で陽気な若い女性。一九四五年三月十日の大空襲に、母親と抱き合っ、ドブの中で死んでいった、私の仲間。

あなたはいま／どのような眠りを、／眠っているだろうか。／そして私はどのように、／さめているというのか？

死者の記憶が遠ざかるとき、／同じ速度で、死は私たちに近づく。／戦争が終わって二十年。もうここに並んだ死者たちのことを、覚えている人も職場に少ない。

死者は静かに立ちあがる。／さみしい笑顔で／この紙面から立ち去ろうとしている。忘却の方へ発とうとしている。

私は呼びかける。／西脇さん、／水町さん、／みんな、ここへ戻って下さい。／どのようにして／死なねばならなかったか。語って下さい。

戦争の記憶が遠ざかるとき、／戦争がきた／私たちに近づく。／そうでなければ良い。

八月十五日。／眠っているのは私たち。／苦しみにさめているのは／あなたたち。／行かないで下さい、皆さん、どうかここに居て下さい。（詩集「表札など」から）

この詩について笹原常与（詩学、昭44・1）は、「おそらく人々は、人間の美しさやかがやかしさを、心ふるわせながらここに読みとるだろう。そして人間の真実の生き方はどうあるべきかについて、改めて思いをいたすだろう。そうさせる力をこの詩は持っている。」と述べ、さらに「静かな語りかけを通して、やがてこの詩は、私たちに、人間の美しさやかがやかしさを葬り去る戦争について深く考えさせていくのである。」と語っている。

ぼくはここまできて、上掲の戦後詩の多くが、いかに戦争に対する近代文明の無力と、人間破壊の暴力とを、主題的に把握し、死屍のイメージをもって、これに烈しく抗議しているかを明かしえたことと思う。さらに、破滅的要素の満ちみちている現代社会において、詩人たちがこれにいかに対処し、その詩的表現そのものを自己の生存証明たらしめているかを、提示しえたことと思う。しかもその個人的生存意識が、田村の詩や鮎川の立言のごとく、それぞれ戦後という不安の時代のさ中で、人間的共同と連帯の意識に支えられ

ていることを、強調しなかったのである。

要するに、人間の運命にとり、死また破滅という終末観に立っての、真実なる生の回復と人間復興の詩想！戦後詩に氾濫する「死」のイメージの真価は、実にここに存し、このほかにはありえないだろう。

注1 田村隆一の詩については、拙稿「田村隆一」(国文学、昭44・8)を見られたい。

注2 山本太郎の詩については、拙稿「山本太郎」(解釈と鑑賞、昭40・1)を見られたい。

注3 戦後詩・「荒地」などについては、拙著「現代詩の視点」(昭36・1)を参照されたい。

——一九六九・七・一六——  
(本学教授)